

自然言語データにおける「笑い」の数量的基礎分析

早川 治子

the statistical analysis of "laughter" in natural utterance

Hayakawa Haruko

We can divide laughter into various kinds. Hayakawa (1996) divided it into three kinds. In this paper, however, all kinds of laughter are taken for granted and concentrate on the statistical analysis based on the attributes of the utterance in which the laughter occurred.

はじめに

「笑い」には様々な種類が想定される。早川（1996）では「笑い」をその談話上の機能により大きく3分類した。しかし、本稿では「笑い」すべてを一括して扱い、数量的傾向・差違をデータ内の項目に沿って分析することを主眼とした。本稿の分析は、項目ごとの出現率、比率の差の検定に基づいており、今後それぞれの項目をクロスして分析すること、「笑い」を個別的に機能上の分類をした上で項目とクロス分析すること必須である。今回もクロス集計を試みてはみたが、各項目の度数が小さすぎ、検定の対象とはなり得なかったため、言及していない。今後、この種のデータの蓄積が急務であることが明らかであり、現在、現代日本語研究会では男性を主とした「男性のことは・職場編」を作成中であり、このデータと合わせることでより正確な分析が可能となると考えている。

1. データ

分析対象となるデータは、現代日本語研究会編「女性のことば・職場編」に収められた自然談話資料発話 1 1 4 2 1 件である。この中から「笑い」を抽出した。「笑い」は、〈笑い〉、〈笑いながら〉、〈笑い・複〉といった様々な形で入力されており、総数 8 8 5 件であった。この 8 8 5 件とそれぞれの発話に付加された属性項目とをクロス分析した。

2. 分析

①

2-1. 場面 1

場面 1 は「朝、職場についてから 1 時間」、「会議打ち合わせなどのとき」「休憩」と 3 場面に分けられている。それらの件数中の「笑い」の出現率をみると、以下表 1-1 のように、休憩場面に「笑い」が多出し、朝の場面はその中間、会議場面では少ないことがわかる。「笑い」の出現の多寡がリラックス度と正比例すると仮定すれば、「雑談」場面ではかなりリラックスし、「会議」場面では緊張していると考えられる。また、このデータの当初の収録目的である「会議」場面はフォーマルな談話を、「雑談」場面はインフォーマルな談話を、「朝」の場面はその中間をとりたいという意図から考えると「会議」場面では、フォーマルな発話が多く、緊張度も高く、「笑い」の出現率も低いということが言え、「雑談」場面では、インフォーマルな発話が多く、緊張度も低く、「笑い」も多出すと考えられる。

表1-1 場面1による「笑い」出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率「笑い」/総発話数*
会議	162	2663	6.1%
休憩	429	4771	9.0%
朝	294	3987	7.4%
計	885	11421	7.7%

(以下比率はすべて「笑い」の出現数のその項目の総発話数に対する比である。)

この比率の差を検定すると、以下のようで、「朝」、「休憩」、「会議」ともに相互に5%水準で有意に差があることがわかる。

表1-2 場面1の比率の差の検定

	休憩	会議
朝	*2.74	*2.04
休憩	---	*4.44

(*印は5%水準で有意であることを示す。)

前述の早川(1996)で「笑い」は大きく3種に分けられ、「仲間づくり」の「笑い」と名付けられたものは、雑談場面、仲間内のリラックスした場面に多出するが、「バランス」の「笑い」は緊張度の高い場面、例えば要求をする場面、会議場面などに多出する。今回は「笑い」の種別化を行わず、「笑い」一般として扱った。これに種別をクロスして分析すると例えば「バランス」の「笑い」は「会議」場面に多いということが想定される。「バランス」の「笑い」に比して「仲間づくり」の「笑い」の「笑い」全体に占める率が圧倒的に多く、雑談が休憩場面に多く出現することと考え合わせると「休憩」時の雑談における「仲間づくり」

の「笑い」の多さがこのような結果になったと考えられる。今後、「笑い」の種別化を行い、再度統計的な検定を行う必要がある。

2-2. 場面2

場面はまた場面2の項目でその内容により「院生の指導」「検討会」「休憩時雑談」と具体的に細分化されている。「会議」の場面でも途中から「雑談」に移ることもあり、「朝」の場面でも途中から会議のような「打ち合わせ」に移ることもあるからである。この項目に基づき、「雑談」と「雑談以外」の分類し、その出現率と比率の差の検定を行った。

表2-1 場面2による「笑い」出現数と出現率

	「笑い」の出現数	発話の総数	比率
雑談以外	222	4901	4.5%
雑談	663	6520	10.2%
総合計	885	11421	7.7%

表2-2 場面2による比率の差の検定

	雑談以外
雑談	*11.16

雑談場面では10.2%の高率で「笑い」が出現し、「雑談以外」との差は5.7ポイントである。比率の差の検定は以下のように、5パーセント水準で、11.16のZ値を示す。「雑談」場面に「笑い」が多いことが裏付けられる。

2-3. 直前文の話者との関係

この項目は直前の発話との間に発話者の交代があったかどうかを見るものである。その出現率をみると、以下表3-1のようで、同人と「笑い」の共起率が8.6パーセントと別人の7.0パーセントより高く、比率の差の検定では2.7のZ値を示し、5パーセント水準では有意である。つまり話者交代のない時のほうがある時より長いという結果である。

表3-1 「直前文の話者との関係」による「笑い」出現数と出現率

	笑いの出現数	発話の総数	比率
〈最初〉	13	243	5.3%
同人	236	2746	8.6%
別人	583	8290	7.0%
別人・同人	0	1	0.0%
同人・別人	0	1	0.0%
*	36	44	81.8%
〈不明〉	17	96	17.7%
計	885	11421	7.7%

表3-2 「直前文の話者との関係」の比率の差の検定

	別人
同人	*2.70

2-4. 発話者

この項目はその発話が誰によってなされたかが入力されているものであるが、発話者数は延べ159人に上る。この内協力者のみを限り、ど

のように「笑い」の出現率が異なるかを見たものが表4-1である。最も少ない比率を示す者は14Aの0.0%、最も高い比率を示す話者は15Aの17.7%であり、話者によりかなりのばらつきがあることがわかる。

表4-1 「協力者」による「笑い」出現数と出現率

協力者	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
01A	6	218	2.8%
02A	2	164	1.2%
03A	11	337	3.3%
04A	7	349	2.0%
05A	28	412	6.8%
06A	23	384	6.0%
07A	16	159	10.1%
08A	16	356	4.5%
09A	33	307	10.7%
10A	79	480	16.5%
11A	9	354	2.5%
12A	2	146	1.4%
13A	39	453	8.6%
14A	0	3	0.0%
15A	77	435	17.7%
16A	33	263	12.5%
17A	51	327	15.6%
18A	10	219	4.6%
19A	11	165	6.7%
計	453	5531	8.2%

また発話者多数となっているものとそれ以外にも著しい差が見られたので以下に示した。「笑い」が多数の発話者に共有されるものであることがわかる。

表4-2 「発話者の人数」による「笑い」出現数と出現率

	「笑い」の出現数	発話の総件数	比率
多数	40	45	88.9%
個人	845	11376	7.4%
計	885	11421	7.7%

この比率の差の検定は以下のようで、Z値20.40で有意である。

表4-3 「発話者の人数」の比率の差の検定

	多以外
多	*20.40

2-5. 発話者性、相手性及び性別関係

発話者の性、相手の性、また相手が同性か、異性かによっても「笑い」の出現率は異なる。

表5-1 「発話者性」による「笑い」出現数と出現率

性別	「笑い」の出現数	発話の総数	比率（「笑い」/総発話数）
女	691	8856	7.8%
男	141	2361	6.0%
*（多数）	40	45	88.9%
？	13	159	8.2%
計	885	11421	7.7%

女性の方が男性よりよく笑う傾向にある。比率の差の検定ではZ値3.02で5%有意である。

表5-2 「発話者性」の比率の差の検定

	男	*	?
女	*3.02	*19.76	0.14
男	---	*20.89	1.12
*	---	---	*10.90

次に相手の性別で見ると

表5-3 「相手性」による「笑い」出現数と出現率

性別	「笑い」の出現数	発話の総数	比率（「笑い」/総発話数）
女	345	5940	5.8%
男	160	2506	6.4%
—	0	4	0.0%
*	331	2142	15.5%
?	49	829	5.9%
計	380	11421	3.3%

表5-4 「相手性」による比率の差の検定

	男	*	?	—
女	1.02	*13.82	0.12	x
男	---	*10.03	0.49	x
*	---	---	*6.98	x
?	---	---	---	x

女性より男性の方が笑いかけられる比率が高く出ているが、この比率の

差の検定では5%水準では有意ではなかった。

発話者が自分と同じ性の相手に言ったか、違う性の相手に言ったかを示す項目が性別関係の項目であり、それによると以下のものである。

表5-5 「性別関係」による「笑い」出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率（「笑い」/総発話数）
異	193	3747	5.2%
同	311	4640	6.7%
*	332	2150	15.4%
?	49	884	5.5%
計	885	11421	7.7%

同性間の方が異性間よりよく笑う傾向があり、比率の差の検定においても以下のように、Z値が2.97となり、5%水準で差が認められる。

表5-6

	異
同	*2.97

2-6. 年齢及び年齢関係

発話者年齢層別に「笑い」の出現数を見ると以下のものであり、

表6-1 「発話者年齢別」による「笑い」出現数と出現率

	笑いの出現数	発話の総数	比率
20歳以下	0	39	0.0%
20代	201	2996	6.7%

自然言語データにおける「笑い」の数量的基礎分析

30代	330	3733	8.8%
40代	210	2590	8.1%
50代	39	1318	3.0%
60代	18	226	8.0%
*	81	404	20.0%
?	6	115	5.2%
計	885	11421	7.7%

比率の差の検定は以下である。

表6-2 「発話者年齢別」による「笑い」の比率の差の検定

	20代	30代	40代	50代	60代
20代以下	x	x	x	x	x
20代	---	*3.22	*2.00	*4.95	0.72
30代	---	---	1.02	*7.05	0.45
40代	---	---	---	*6.23	0.01
50代	---	---	---	---	*3.69

この出現率を%のスケール上に載せると以下のようである。

%	2	3	4	5	6	7	8	9
年代		50		?		20	平 60 40	30

表6-1, 6-2及びスケールを参照すると、30代、40代、60代の順で「笑い」の出現率は高く、20代はそれらに比して低く、50代が特に低い出現率を示すことがわかる。50代は平均を4.7ポイント下回り、笑わない年代ということになる。その出現率の低さは比率の差の検定にも明らかで、50代は各年代層との、差の検定でZ値が20代と4.95、30代と7.05、40代と6.23、60代と3.69

ですべて5パーセント水準で有意である。20代は30代、40代、50代ともに有意な差が認められる。60代、40代、30代は出現率が8パーセント台であり、近似し、それぞれの差は有意ではない。60代が50代以外と有意でないのはその出現数の低さが起因しているとも考えられる。20代が60代を除くすべての年齢層、50代がすべての年齢層と有意であることは今後その発話内容、例えば、フォーマルな発話か、インフォーマルな発話かなどを考慮に入れて、クロス集計する必要がある。

次に「笑い」の相手別に出現数と出現率、検定結果を見る。

表6-3 「相手年齢別」による「笑い」出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
10歳以下	0	20	0.0%
10代	1	38	2.6%
20代	123	2286	5.4%
30代	202	2902	7.0%
40代	90	1535	5.9%
50代	45	1037	4.3%
60代	20	197	10.2%
*	398	3161	12.6%
?	2	118	1.7%
計	885	11421	7.7%

表 6-4 「相手年齢別」による「笑い」の出現率差の検定

	20代	30代	40代	50代	60代
10代以下	x	x	x	x	x
10代	0.75	1.05	0.84	0.51	1.49
20代	---	*2.33	0.63	1.27	*2.76
30代	---	---	1.4	*3.00	*1.68
40代	---	---	---	*1.70	*2.32
50代	---	---	---	---	*3.35

「笑い」の出現率を低い順に並べると

%	2	3	4	5	6	7	8	9	10
年代	10		50	20	40	30	平均		60

となり、差の検定の結果と総合すると、60代は平均を2.5ポイント上回ってよく「笑い」の相手となり、その差は10代の相手以外とは有意である。反対に10代は5.1ポイント平均を下回り、パーセント上は「笑い」の相手となる率が最も低いが、すべての年代との比率の差は認められない。それ以外の年齢関係においては30代は平均を0.7ポイント下回るが50代、20代、40代より多く「笑い」の相手とされる。比率の差の検定においては20代、50代とは差が有意であるが、40代とは有意ではない。20代、40代、50代の相手は出現率としては大差はないが、三者間の比率の差の検定では20代と40代、20代と50代の差は認められないが、40代と50代とは差が認められるという結果になった。「笑い」の発話者との比較で見ると60代は「笑い」の発話者としては平均的であるが、よく「笑い」かけられる対象となる年代であり、30代、40代は「笑い」の発話者になる率に比して、

「笑い」の相手となる率が低いことがわかる。20代、50代は笑いもしないし、笑いかけられもしないといったことになる。特に50代にその傾向は著しい。

次に年齢関係の項目を見る。これは発話者と相手との年齢の上下関係であり、発話者を基準にして、20歳以上年上を「上々」、5から19歳年上を「上」、4歳上から4歳下を「同」、5歳から19歳年下を「下」、20歳以上年下を「下々」と分けたものである。出現率及び差の検定は表6-5、表6-6のようである

表6-5 「年齢関係」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
上上	31	578	5.4%
上	113	1890	6.0%
同	218	3065	7.1%
下	105	1946	5.4%
下下	15	538	2.8%
*	401	3275	12.2%
?	2	129	1.6%
計	885	11421	7.7%

表6-6 「発話者年齢別」による比率の差の検定

	上	同	下	下々
上上	0.55	1.52	0.03	*2.16
上	---	1.55	0.78	*2.92
同	---	---	*2.41	*3.76
下	---	---	---	*2.50

出現率をスケール上に並べ、比率の差の検定とともに考察してみる。

2	3	4	5	6	7	8	9	12
下々			上々・上 下	同	平均		*	

下々（20歳以上年齢が若い者に対する「笑い」）は平均を4.9ポイント下回り、他の年齢関係（上々、上、同、下）の者と有意に差が認められる。年齢が20歳以上下の者に対しては他の年齢関係の者に比して笑わないということである。また同と下の年齢差の関係をみると同年代に比して下の者には笑わない。この差には有意の差がある。しかし上々、上、同年代の間には出現率に差は認められない。つまり、概観すれば、上々、上、下、同の年齢関係にあるもののまとまり内では（同と下に有意の差があるが）、概して有意の差がなく、これらは下々に対して有意の差を示している。つまり自分より20歳以上若い者には著しく笑わないが、自分より10歳離れた者、同じもの、10歳上、20歳上の者にはあまり差を付けていないということになる。

年齢関係を自分と同年齢、上の者（上と上々をたしたもの）、下の者（下と下々をたしたもの）と3段階に分けて、出現率と差の検定も行ったが、同年齢の者に対しては自分と上下関係にある者よりよく笑うが、上の者と下の者とどちらに対してよく笑うかは検定上差がなかった。

表6-7 「年齢関係（3段階）」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現数	発話の総数	比率
下々+下	120	2484	4.8%
同	218	3065	7.1%
上々+上	144	2468	5.8%

表6-8 「発話者年齢別」による「笑い」の比率の差の検定

	同	下+下々
上+上々	*1.91	1.57
同	---	*3.53

更にこれは項目にないものであるが、自分と年齢的に離れているかどうかを上・下関係なく出現率と比率の差の検定を調べた。

表6-9 「年齢関係距離(3段階)」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現数	発話の総数	比率
同	218	3065	7.1%
下+上	218	3836	5.7%
上々+下々	46	1116	4.1%

表6-10 「発話者年齢距離別」による「笑い」の比率の差の検定

年齢	下+上	下々+上々
同	*2.43	*3.51
下+上	---	*2.03

自分と同年代にはよく笑うが、自分から年齢が離れるにつれ「笑い」の出現が少なくなり、検定上も有意である。表6-7、表6-8の結果とも総合すれば、下の者と上の者は区別しないが、年齢の離れた者より近い者によく笑うと言える。

2-7. 職階関係

「役職関係」というのは相手が役職上自分より上か下かと言うことで

ある。この結果は以下のものである。

表7-1 「職階関係」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
上上	43	589	7.3%
上(上)	9	161	5.6%
上	45	912	4.9%
同	193	2198	8.8%
下	22	808	2.7%
下(下)	14	169	8.3%
下下	21	640	3.3%
無	44	1202	3.7%
?	33	497	6.6%
*	461	4245	10.9%
計	885	11421	7.7%

「職階関係」は細かく7段階に分かれているため、3段階に分けて、出現率と差の検定を行った。

表7-2 「職階関係(3段階)」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現数	発話の総数	比率
上+上(上)+上	97	1662	5.8%
同	193	2198	8.8%
下+下(下)+下下	57	1617	3.5%

表7-3 「職階関係(3段階)」による「笑い」の比率の差の検定

	同	下+下(下)+下
上+上(上)+上	*3.44	*3.13
同	---	*6.48

比率の差の検定では3者間すべてに差が認められ、自分と職階が同じ者にはよく笑い、上下関係においては上の者に下の者よりよく笑うことがわかる。

これを自分に対して職階上遠いか近いかを基準に3段階に分け出現率と比率の差の検定を行った。

表7-4 「職階関係(自分との距離3段階)」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現数	発話の総数	比率
同 データの個数	193	2198	8.8%
上+下	67	1720	3.9%
上上+上(上) +下(下) +下下	87	1559	5.6%

表7-5 「職階関係(自分との距離3段階)」による比率の差の検定

	上+下	上々+上(上)+下々+下(下)
同	*6.10	*3.68
上+下	---	*2.28

職階関係の距離においては自分の同僚、次に遠い者、近い者の順に笑う

という結果が出た。

2-8. 入社年関係

この項目は入社したのが、発話者を基準にして先か後かを示している。出現率と比率の差の検定は以下のようなものである。

表 8-1 「入社年関係」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
先先	48	444	10.8%
先(先)	5	109	4.6%
先	49	970	5.1%
同	117	978	12.0%
後	0	99	0.0%
後後	35	451	7.8%
無	91	2797	3.3%
?	14	454	3.1%
*	461	4245	10.9%
計	885	11421	7.7%

これも 8 段階に分かれているので 3 段階に分け、出現率と差の検定を行った。

表 8-2 「入社年関係 (3 段階)」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
先+先(先)+先先	102	1523	6.7%
同	117	978	12.0%
後+後(後)+後後	100	1424	7.0%

表8-3 「入社年関係（3段階）」による「笑い」の比率の差の検定

入社年関係	同	後
先	*4.55	0.35
同	---	*4.15

同じ者とは有意によく笑うが、先か後かには区別して笑わないという結果である。

これを再度相互の入社年に差があるかどうかで出現率を比率の差の検定を試みた。

表8-4 「入社年関係距離（3段階）」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
同	117	978	12.0%
後+後(後)+先+先(先)	119	2052	5.8%
先先後後	83	895	9.3%

表8-5 「入社年関係距離（3段階）」による比率の差の検定

	後+後(後)+先+先(先)	後後+先先
同	*5.92	*1.88
後+後(後)+先+先(先)	---	*3.43

すべて有意の差が認められる。同期入社の人とはよく笑うが、入社年に差があるか、ないかによれば、差がある者によく笑うという結果である。表8-3、表8-4とも総合して分析すると、先か後か、より、入社年に差があるかどうかに関係していると考えられる。

2-9. つきあい年関係

この項目はどのくらい長くつきあっているか示したものである。

表9-1 「つきあい」による「笑い」の出現数と出現率

	笑いの出現数	発話の総数	比率
～1年	212	3301	6.4%
1～2年	0	4	0.0%
2～4年	126	2025	6.2%
5～9年	53	767	6.9%
10～19年	1	379	0.3%
20年～	7	126	5.6%
無	1	96	1.0%
?	24	478	5.0%
*	461	4245	10.9%
計	885	11421	7.7%

表9-2 「つきあい年関係」による「笑い」の比率の差の検定

	1～2年	2～4年	5～9年	10～19年	20年以上
～1年	x	0.29	0.49	*4.86	0.39
1～2年	x	x	x	x	x
2～4年	x	---	0.66	*4.76	0.30
5～9年	x	---	---	*5.00	0.56
10～19年	x	---	---	---	*4.12
20年～	x	---	---	---	---

10から19年のつきあい関係における「笑い」のみに各つきあい関係に比べて有意に差があるが、その他には差が認められない。つきあいが長いからよく笑う、または笑わないとは言えないという結果である。

2-10. 接触量関係

どれくらい多くまたは少なく接触するかを見た項である。

表10-1 「接触量」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
多多	279	4276	6.5%
多	69	1347	5.1%
普通	45	487	9.2%
少	2	100	2.0%
少少	19	686	2.8%
*	461	4245	10.9%
?	10	280	3.6%
計	885	11421	7.7%

これを出現率のスケール上に置くと以下のようである。

2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
少	少々?		多	多々	平均		普通		*

表10-2 「接触量関係」による「笑い」の比率の差の検定

接触量関係	多	普	少	少々
多々	*1.86	*2.56	*1.82	*3.84
多	---	*3.23	1.39	*2.46
普	---	---	*2.43	*4.81
少	---	---	---	0.44
少々	---	---	---	---

「少」のサンプル数が2件と少ないため、3段階で再度出現率と差の検

定を行った。

表10-3 「接触量（3段階）」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
多+多多	348	5623	6.2%
普通	45	487	9.2%
少+少少	21	786	2.7%

表10-4 「接触量（3段階）」による「笑い」の比率の差の検定

	普	少、少々
多々、多	*2.63	*3.97
普	---	*5.14

表10-3の3段階による出現数と比率の数値でもわかるように接触量の多いほうが接触量少ない方に比してよく笑い、表10-4の比率の差はそれぞれに有意である。

2-11. 会話量

よく会話するかどうかを入力した項目である。

表11-1 「会話量」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
多多	238	3836	6.2%
多	78	1577	4.9%
普通	67	565	11.9%
少	7	197	3.6%

少少	19	682	2.8%
?	15	319	4.7%
*	461	4245	10.9%
計	885	11421	7.7%

これをスケールの上に置いてみると

%	3	4	5	6	7	8	9	10	11
会話量	少々	少	?多	多々		平均			*普通

表 1 1 - 2 「会話量」による「笑い」の比率の差の検定

	多	普	少	少々
多々	*1.79	*4.94	1.51	*3.55
多	---	*5.61	0.86	*2.33
普	---	---	*3.39	*6.29
少	---	---	---	0.55
少々	---	---	---	---

普通以外の会話量の多寡をみると、会話量の「少」と「普通」の間、「少」と「少々」の間には有為の差がないが、それ以外はすべてに有為の差があり、会話量の多寡に応じて笑いの量は増加している。多く会話すると多く笑うという結果が出ている。

2 - 1 2. 親疎関係

親しいか親しくないかを協力者の判断により入力した項目である。

表12-1 「親疎関係」による「笑い」の出現数と出現率

	「笑い」の出現件数	発話の総件数	比率
親親	199	3122	6.4%
親	68	1040	6.5%
普通	124	1946	6.4%
疎	8	265	3.0%
疎疎	15	584	2.6%
*	461	4245	10.9%
?	10	219	4.6%
計	885	11421	7.7%

%	3	4	5	6	7	8	9	10
親疎 関係	疎々疎		?		親々親 普通	平均		*

表12-2 「親疎関係」による「笑い」の比率の差の検定

親疎関係	親	普	疎	疎疎
親親	0.19	0.003	*2.19	*3.62
親	---	0.17	*2.18	*3.49
普	---	---	*2.16	*3.54
疎	---	---	---	0.37

親疎関係において「親親」、「親」と「普通」が一つのまとまりをなし、三者間に有意の差がなく、「疎」と「疎疎」がもう一つのまとまりをなし、二者間に有意の差がない。しかし、前者のまとまりと後者のまとまりの間には有意の差が認められる。つまり、とても親しい間柄、親しい間柄、普通の間柄のあいでは区別せずによく笑い（6.5%、6.4

%)、疎の関係の人、疎疎の関係の人にも区別をつけずにあまり笑わない(3.0%、2.6%)ということがわかる。

3. まとめ

この結果を概観すると場面1においては休憩、朝、会議の順で「笑い」が多出し、これはそれぞれに含まれた会話の種類におけるフォーマル度、リラックス度によると考えられる。場面2においては雑談場面に多く「笑い」が出現することが特徴的であった。直前文の話者との関係においては話者交代が起こらないほうが出現率が高い。発話者との関係においては話者によって「笑い」の使用の多寡に差があることがわかる。また「笑い」は多数の話者によって共有される点にその特徴があることがわかる。性別においては女性のほうが男性よりよく笑う。また男性のほうが女性よりよく「笑い」の相手となるが、その比率の差の検定では有意ではなかった。また異性より同性のほうがよく笑いかけることがわかった。「笑い」の発話者となる年代においては50代が著しく低い以外一定の傾向は見られなかったが、「笑い」の相手としては60代のような年齢の高い相手には笑うという結果が出た。

発話者と相手の相互の年齢差の上下関係においては自分より20歳以上若い者には著しく笑わないが、それ以外の者にはあまり差をつけていない。しかし、自分の年齢との上下関係ではなく、差によって同年齢、5から19歳離れている者、20歳以上離れている者と区別すると、同年齢、5から19歳、20歳以上の順で、自分と近い順で笑う。職階関係においては同じ職階の者に一番よく笑うが、上下を比較すると、上の者の方によく笑う。しかし、自分の職階からの差で見ると、同職階の者に対しては一番よく笑うが、差のある人に対してのほうが、よく笑うという結果であった。入社年関係においては入社年の同じ者にはよく笑う

が、後か先かに関しては区別しない。しかし、入社の後先と関係なく、その差においては同期以外は差のある方に対しての方がない方に対してよりよく笑う。これは職階関係と同じ傾向である。

表に示すと以下のようなものである。

	上下・先後関係	差の関係
年齢関係	同>上/下	同>差小>差大
職階関係	同>上>下	同>差大>差小
入社年関係	同>先>後	同>差大>差小

つまり年齢関係のような職場と関係のない場合は差のないものによく笑い、差が大きくなるにつれ、笑わなくなる。しかし、職階関係、入社年関係のような職場の関係においては同じものには一番よく笑うが、その次には差の大きいものに笑い、小さいものには笑わない傾向にある。「笑い」が差を縮めるため、バランスをとるために使用されていたと言える。

つきあい年に関してはその長さにおいて一定の傾向は見られなかった。接触量に関しては普通を除けば多い方がよく笑う傾向である。会話量に関しては普通を除けば多く会話する方がよく笑う。親疎関係においては疎、疎疎のものに対しては笑わないが、普通、親、親親ではあまり区別していないという結果であった。

今回の分析は、第一段階の基礎分析であり、接触量、会話量、親疎ともに協力者の主観に基づく分類であるので、入社年、つきあい年、職階、年齢等の客観的項目とクロスして、より緻密な統計的分析をする必要があると考えられる。それにはデータの蓄積、発話内容の分析も必須である。しかし、今回の分析で自然談話における「笑い」の動きのようなものが見えたと考える。

参考文献

- 早川治子 (1994) 「「笑い」の談話機能」『言語と文化』第7号' 94
文教大学言語文化研究所
(1997) 「日本人の「笑い」の談話展開機能2-出現率と場面」
『言語と文化』8号' 95 文教大学言語文化研究所
(1997) 「「笑い」の意図と談話展開機能」『女性のことば・職
場編』、現代日本語研究会 ひつじ書房
- Krippendorff, Klaus (1980) "Content Analysis "Sage Publication,
Inc. (三上俊治、椎野信雄、橋元良明訳【メッセージ分析の技
法】勁草書房1989)
- 杉山明子 (1984) 「社会調査の基本」朝倉書店
- メイナード・泉子・K (1997) 「談話分析の可能性」くろしお出版